

# バレーボールに関する理論的研究

## —Tacticsの構成要素より—

新 谷 崇 一 (一般体育理論・実技)

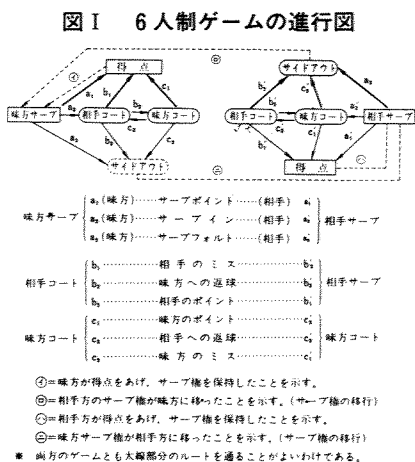
### I. はじめに

1895年、アメリカで考案されたバレーボールを日本へ紹介したのは1908年、欧米の体育事情を視察に行った大森兵藏である。

その後、様々な歴史を歩み、また幾多のルール改正を伴いながら今日のバレーボール熱を急速に高めたのは1964年の東京オリンピックで女子優勝、男子3位という輝かしい成績を納め、「東洋の魔女」と騒がれてからであろう。

しかし、技術面で先行していた日本のバレーボールにも限界がみられ、現在ではすぐれた競技力が要求され、特にパワーと高さのバレーボールが主流を占めるようになってからは、外国勢にそのトップの座を明け渡すようになった。

バレーボールに要求される競技力にはどのようなものがあげられるであろうか。まず、現行の6人制バレーボールのゲーム進行を図式化すると図Iのように、常に味方のプレーを有利に展開していく



(「バレーボールの教科指導」豊田、山本編著、遊戯社 1980. P.18より)

ためにはサーブ権の確保が条件となる。

このサーブ権の確保において攻撃、守備という様々な攻防のパターンが展開される。その展開に要求されるのが技術、戦術、体力、精神力、チームワークである。バレーボールに要求される競技力を概観すると以下ようになる。

まず、技術とはボールコントロールとボディコントロールに関する個人的基礎技術とチーム技術としての集団的連けい技術が基本技術となり、この基礎技術を土台にして様々な高度技術が組み込まれて成り立つものである。

次に、戦術とは自分の持っている技術をどのようなチームに対しても十分に発揮できるような「かけひき」ともいえる技術と考えられる。

第3に体力、その体力に要求される要素としては筋力、スピード、パワー、筋持久力、柔軟性、全身持久力、調整能力があげられ、これらをいかに備えるかが条件となってくる。

第4に精神力、東京オリンピック大会を契機にこの精神力の重要性が再認識されるようになったが、これは一朝一夕にして得られるものではなく、普段の練習の過程で自然に養成され、ゲーム展開において技術とは違った側面で重要視される。

最後にチームワークであるが、バレーボールはチームの構成員相互の信頼において成立するものであり、個人やチームが明確な目標を持ち、それに向って努力し、練習を重ねることによって養成され、これはチームゲームには欠かすことのできない要素である。

このように、バレーボールに要求される競技力としては以上の5つが主なものとしてあげられる。本研究においては、競技力の中で特に「戦術」に焦点をおき、バレーボールで個人及びチームに要求される「戦術」について理論的な考察を行う。しかし、本研究における「戦術」とは「Tactics」という英語に意味づけられるものであるが、単に対戦相手にどのような戦術を用いるかという「かけひき」そのものを意味するものではなく、本論において詳述するように、ある状況に対してより適切な対応を示すには、我々の身心はどうあらねばならないか、またその時必携すべき要素は何であるかという立場から論を展開していく。

## II. 本 論

### 1. Tacticsとは

“Tactics”という単語は報道機関において「タクティクス」という発音で馴染みのある言葉として知れ渡っているが、その真意は理解されていないのが現状であろう。

Tacticsとは辞典によると、1.「戦術、用兵学、兵学、兵法」、2.(複数構文)「策略、術策、かけひき」<sup>注1</sup>とあり、また他の辞典によると、(単数扱い)「戦術、兵法、用兵学」<sup>注2</sup>と訳されている。

このTacticsに関連しながらも区別して使用されているものとして“Strategy”という単語がある。Strategyとは辞典によると、「用兵学、兵法、戦術」<sup>注3</sup>とあり、また他の辞典によると、「用兵学、兵法」、「戦略(大規模の)、作戦、策略」<sup>注4</sup>と訳され、日本語ではTacticsと同意のように示され区別に戸惑う。しかし、英語圏においてこの相違には次のような表現が辞典にみられる。

「The book says that tactics differs from strategy.」

「Strategy wins war;tactics wins battle.」<sup>注5</sup>とあり、Strategyは全体の作戦計画を、Tacticsは個々の戦闘の用兵を意味するとある。

以上から、Strategyは全体を意味した概念として、またTacticsは個々を意味した概念として受け止められよう。

また、ポール・ワイスは彼の著書<sup>注6</sup>において、StrategyとTacticsを明確に区別しながら健康について定義している。彼の「健康」を一言で定義づけるならば、健康とは「生命の統一体としての全ての重要な要因を所有している人であり、適切な行為への統一と有効な力を所有していることである」、つまり「過度の困難や浪費なしに、物事を役立てさせるような一連の力と作用を所有している人」<sup>注7</sup>ということになる。このように定義づけるにあたって、日常生活とか、スポーツ場面で我々が卓越を求めるとき要求されるものとしてStrategyとTacticsが重要な存在にあると述べている。

以下、ポール・ワイスの言うStrategyとTactics、そして、本論であるバレーボールで要求されるTacticsとは何かを述べることにする。

「人が予期せぬ出来事に遭遇したとき、その環境

の変化のためや、また他の行為の故に人は不適切な行動をとる。このとき、その事態に適切に対応するために要求されるものが、StrategyとTacticsである」<sup>注8</sup>という。そして、ポール・ワイスはStrategyを「行動の全過程を具体化する技術」であり、Tacticsを「どのような状況でも、自分の力を秩序立てて使用する技術」<sup>注9</sup>であると定義する。先の、辞典によるStrategyとTacticsの概念においてStrategyを全体概念とし、Tacticsを個々の概念として受け止めたものとある程度の一致がみられる。

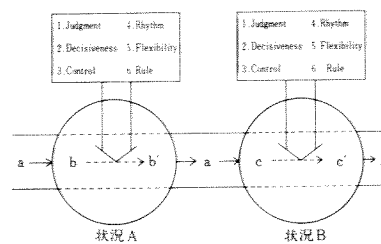
Strategyは「Tacticsの援助の総合から成り立ち」<sup>注10</sup>個々のTacticsをいかに行動の全過程でうまく使いこなすかということが問題とされる。

従って、Strategyが明確でないとTacticsの援助は無意味となり、自分の行動は相手まかせ、運まかせとなってしまう。そのような意味からStrategyはGeneralship(指揮の手腕)<sup>注11</sup>とも言われる。

そのStrategyの援助的存在としてのTacticsは「練習の過程で学び得るもの」<sup>注12</sup>であるが、練習の過程で学び得たものでも、実際のプレーにおいて必ずしも全く同一のパターンは訪れないので、常に新形態をとらねばならない性質をもっている。従って、「ゲーム前のTacticsは青写真」<sup>注13</sup>にすぎない。そのような意味から、TacticsはManagement(術策、かけひき、やりくり)<sup>注14</sup>とも言われる。

また、TacticsはそれがよりTacticalなものとなるために6つの構成要素を所有している。

図II Tacticsの6つの構成要素



これらの6つの要素は図IIのように、ある活動aがある状況Aに遭遇したとき、その状況Aに対して適切に対応するための行為bが要

求される。その行為bに6つの要素が十分に発揮されたとき、その行為はよりTacticalな行為b'となって状況Aに対処し、1つの障害物を無事に通過することができるようになると考えられる。

また、活動aは次の状況Bに遭遇したときにも同様な作用によりTacticalな行為をもって対処する。

そのTacticsの6つの構成要素とは、Judgment(判断力)、Decisiveness(決断力)、Control(統制)、

Rhythm (リズム), Flexibility (柔軟性), Rule (ルール)<sup>15</sup>であるが、これらへの詳述は次節の2. バレーボールにおける Tactics の①にて行う。

以上、要約すると我々は日常生活でいついかなる時不意の出来事に遭遇するかわからない。その時、適切に対応するために我々は自分の行動を具体化することができなければならない。

つまり、あるプランのもとに自分の行動をいかにうまく合致させられるかという技術 (Strategy) と、その具体化の援助となる技術 (Tactics)、とりわけそれを構成している6つの要素を十分に備えているかということになる。ボール・ワイスのいう健康とは、そのような技術と要素を持ち合わせ、いついかなる時にでも発揮できる状態にあることを指している。

次に、バレーボールにおける Tactics の私的位置づけであるが、「はじめに」で述べたようにバレーボールの競技力は、技術、戦術、体力、精神力、チームワークの5つの構成要素から成る。

その構成要素のうち、戦術は「かけひき」を意味するものであったが、その表現はあまりにも抽象的すぎ、また本論で展開しようとする Tactics に意味されるものとは幾分ニュアンスが違う。つまり、一般的に言われる戦術とは「どのような状況で、どのような場面のときに、どのような策を施すか」というかけひきとなるが、本論における Tactics は「ある状況下の、ある場面に対してより適切な行動をとるには、我々の身心はどのような状態であらねばならないか」という、かけひきとは全く意を異にしたものである。

つまり、バレーボールにおいて Tactics が発揮される時、この6つの要素はどのような意味をもって現われてくるかを論じるところに本論の主旨がある。

## 2. バレーボールにおける Tactics

### ① Player における Tactics

ここでの Player は Team という団体に対して個人という意味での Player である。

チームゲームであるバレーボールの理論的な研究は個人と団体の相互関連のもとに進められねばならない。それは、チームは個人個人の総合力によって成り立つものであるからである。

また、本論における Tactics は前節で提示した、Strategy と Tactics との関係に意味されるものであり、主に、それを構成している6つの要素を中心に展開していく。

#### a. Judgment (判断力)

プレイヤーは自分がやらねばならないものに対してあらゆる瞬間に新鮮な判断を下さねばならない。従って、プレイヤーに要求される判断力とは「いつ」、「どこで」、「どのように」適切な行動をとるかを一瞬のうちに見い出さねばならない能力であると言える。例えば、バレーボールのアタックレシーブで、スパイクされたボールに対してその角度、方向、スピードなどを瞬時に判断せねばならない。一流のアタッカーからスパイクされたボールが9mラインを通過するまでの所要時間は男子で0.3秒、女子で0.5秒である。人間の全身反応時間、すなわちある事態に身体が適応しはじめるのに必要な時間は、男女とも0.3~0.4秒であると言われている。そのデータから判断すると、強打に対してレシーブし、それを味方の攻撃へつなげるということはほとんど不可能な状態である。しかも、それに方向が加わることによりレシーブ範囲も広くなり益々不可能さを増すこととなる。しかし、レシーブをある程度可能にするものとしてレシーバーの判断力がプラスされてくる。つまり、相手側セッターからトスされたボールの高さ、位置、それに対するアタッカーの進入角度、そして、自チームのブロッカーの位置などを総合的に判断し、スパイクボールの質と方向を察知し身体を次の動作へ移り易い状態にしておくことは可能である。このような判断力は自然に身につくものではなく、普段の練習の過程で学ばれる。

ボール・ワイスによると「良い実践的判断は良い常識を使うことの習慣である<sup>16</sup>」という。つまり、何をするのか、何をなすべきかをみなす合理的な仮説を作ることの習慣であるともいえる。

そして、その判断力は「トレーニングにより強調され、実行することにより安定さ、強固さを増す<sup>17</sup>」ものである。バレーボールにおける判断力も、普段の練習において養われ、その積み重ねによって確実なものとなってくる。

#### b. Decisiveness (決断力)

「理想的なパフォーマンスは目的と行動の一

致にある」<sup>註3</sup>といわれ、そのとき要求される能力が決断力である。つまり、ある活動の流れの中で不意な出来事に遭遇したとき、我々はどのような行動をとるべきかを判断する。その判断の結果、1つの目的を持った行動が生まれ、それに向って起す行動に対しての決断が下される。

バレーボールにおける決断力とは、前述のアタックレシーブでレシーバーの判断力により、ボールの質と方向を察知した。次に要求されるものが実際にそのスパイクボールに対してレシーブの態勢に入るといふ行為への決断である。

しかし、単に行為を起すだけに決断をするのではなく、そのとき良い結果を得るために、また適切である行為に集中するために「自制心」を要求し、「強制」を避け、心と身体の両方を二者択一の1つへ焦点を合わすことが要求される。従って、決断するということは目的に向った行動に対して「意志する」<sup>註4</sup>ということが必要である。

#### c. Control (統制)

Controlとは「自分の身体が自分の意志のもとに統制されている」<sup>註5</sup>という状態であり、どのような状況に対しても判断から決断という順序を経る時に、それに即応できるような態勢にある身体の状態である。従って、前述した「決断力」において実際に目的に向った行動へ移行する場合に、身体はこの「Control」下にあるということを前提としている。

バレーボールにおけるコントロールとは、前述のアタックレシーブで、判断し実際の行動へと移行する決断の段階において、心が二者択一の1つに焦点を合わすという時点に身体もそれに付随して合わすことができるような状態にあることとなる。つまり、気持だけが先走り、身体はすぐ反応しないという状態ではないことを意味する。

このコントロールも判断力と同様、普段の練習によって養われる。つまり、あらゆる状況に対して判断し、決断するという繰り返しにより習慣化される。その習慣によって得られた動きのパターンは1つの知識となり、次に行なわれるものをもコントロールするようになり、動きに余裕と幅がでてくる。アタックレシーブで、アタッカーからのスパイクボールに対し、回りの状況を総合的に判断して、ボールの質と方向を察知し、その次の瞬間にはより適切な行動へのために身体の移動と

いう決断がなされる。その時点で、身体は自分の思う通り動けるよう統制されていることが要求される。

#### d. Rhythm (リズム)

「明確で適切なリズムはGracefulnessとSkillの結合によって生まれる」<sup>註6</sup>という。つまり、技術そのものから生まれる機械的なリズムと、全体を通しての1つの流れを構成するような「優美さ」がうまく融け合った時に発揮される。

例えば、バスケットボールにおいて、熟練したプレイヤーがあるプレイヤーのシューティングを見たとき、そのシュートされたボールはバスケットに入るか入らないかが即座にわかるという。それは、プレイヤーがパスされたボールをキャッチしてドリブルをし、シュートするという一連の流れの中において身体全体を使った優美な動きとシューティングの際にボールが指先から離れる角度などの技術面との兼ね合わせにより判断できるといふ。

しかし、そのようなバスケットのシューティングのリズムにおいても、そのリズムの表現は行動に一定の間隔を保ちながら行なわれる。つまり、前進と後退、休止と動き、またスピードと方向の中に変化を要求する。このようなリズムの表現はプレイヤーがある状況に遭遇したとき「自分を具体化する方法の結果」<sup>註7</sup>として現われるものと考えられる。従って、リズムはその状況に応じて異なり、また、個人個人において特有なものである。

例えば、個人種目に見られるリズムでは、砲丸投げやハードルなどにおいて明確に現われる。これらの種目では一定の決った手順だけではなく、いつ砲丸を手から離すかという技術面としての明確なタイミングが要求され、<sup>註8</sup>これらの相互関連の上にリズムは生まれている。

また、対人種目である柔道、剣道などにおいては、自分又は相手が試合のリズムを持つ。<sup>註9</sup>

例えば、剣道において片方が前進すると間合いをとるために片方は後退する。横に動けばそれに従って横へ移動する。また、そのテンポは二人の間においては明確なものとして現われ、二人が単一のシーンを作りあげる<sup>註10</sup>ようなリズムで構成されている。そこで、片方のテンポが崩れたとき打ち込むという次の動作へと発展していく。

団体種目においては「最初に起こしたプレイの

リズムに服従させられるような形で現われる<sup>註11</sup>といわれる。例えば、バレーボールでは、サーブ権を得ている側、つまりサーブをするプレイヤーにリズムがおかれる。従って、サーブを成功させるか、失敗するかはチームのリズム権の放棄にまでつながるものである。

しかし、バレーボールのリズムは、AチームとBチームとの間にあるボールに対するリズムと、自チーム6人の中にあるボールに対するリズムと、対人（例えば、セッターとアタッカー）の間にあるボールに対するリズムと、個人とボールとの二者間のリズムというように区分される。

プレイヤーにおけるTacticsということで、ここでは個人とボールとの二者間のリズムについて述べる。個人とボールとのリズムとは、ボールの質、つまり、スピード・変化・方向に対するプレイヤーの調和の程度とみなされる。例えば、アタックレシーブに対して、ワンタッチボールかそうでないボールかでは、レシーブに対するリズムが違う。前者はワンテンポ間合いを置いてレシーブしなければ入り過ぎになってしまうが、後者の場合は決断と同時にレシーブ動作へ入らなければならない。また、経験者と未経験者のアンダーハンドパスに対するリズムは、経験者はボールの落下点に早めに入って余裕をもってパスをするか又はその動作が同時となるが、未経験者はボールの落下速度、又はボールの軌跡を判断できずボールの落下点より前に入り過ぎたり、また落下点に間に合わなかったりボールのスピード、変化に対するリズムがつかめないという現象がみられる。

これらは、個人とボールとの二者間のリズムとしてとらえられるものである。しかし、このリズムは、他の構成要素と同様、練習によって次第に獲得されるものである。

#### e. Flexibility (柔軟性)

Flexibilityとは「ある人が与えられた機会に適切に反応できるように要求されるものであり、その時、新しい要求に適切に対応する能力<sup>註12</sup>であるといわれる。この柔軟性にはAgility (すばやさ)とAlertness (油断のなさ)<sup>註13</sup>という要素が加わる。前者は、柔軟性をより機敏なものとし、後者は、なさねばならないものをより適切にするという性格のものである。例えば、闘牛において、闘牛士にはAgilityは勿論のこと、生死にかかわるよう

な場面では特にAlertnessが重要になってくる<sup>註14</sup>と言われる。しかし、生死にかかわるような闘牛に限らず、それが勝敗に関係するようなものであればAlertnessも重要な要素となってくる。

バレーボールにおける柔軟性は到る所でみられる。変化球サーブに対するサーブレシーブは手元で最後に変化するところまでボールを追い、その変化の最後まで身体全体で対処していかなければ正確な返球は不可能である。

また、特に柔軟性が要求される場面として、フェイントへのレシーブがあげられる。相手側の攻撃をスパイクと判断し、次の行為へと決断を下した瞬間に相手側の攻撃がフェイントへ変更する。その変化に対して、いかに素早く判断、決断を切り換えるかが要求される。その切り換えに心と身体がどれだけ柔軟であるかが問われる。

つまり、これはControlの場面にも出てきたように心と身体が二者択一の1つに焦点を合わせる点において、焦点をいかに早く合わせ直すか、また判断、決断を変更した後、次の段階に対していかに早く二者択一の問題に焦点を合わせられるかということになる。

従って、この柔軟性も他の要素と同様、普段の練習によって養われるが、この場合、精神面と肉体面とでは練習の内容、方法に違いが現われる。前者の場合はFlexibilityという単語そのもので表現されるが、後者の場合にはSupplenessという単語が加わる<sup>註15</sup>。つまり、精神面の柔軟性の場合には、判断、決断に対する練習の繰り返して養われるが、肉体面での柔軟性は機敏な反応のために身体のしなやかさ、つまり曲げたり、ひねったりする肉体の鍛練が要求されてくる。

そして、両面の柔軟性が平均して養われることにより、Tacticalな行動も可能となる。

#### f. Rule (ルール)

スポーツにおいて、ルールは一般的に「競技規則」を意味している。しかし、この競技規則はときとして「やっていけないこと」という罰則的な意味を含んだものとして受け止められがちである。

例えば、ブロックに参加して着地したとき審判にパッシングザセンターラインを指摘された。もともと、センターラインは危険防止のために存在するものであるが、自分のミスによるパッシングザセンターラインがあたかも相手の領域を侵犯

してしまっただけのように受け止められ、その結果サイドアウト、又は相手側へポイントを与えたと解釈されがちである。

しかし、Tacticsを構成する要素としてのルールは、主に「ゲームの始まりと終りを関係づける」ものであり、また「ゲームで理想を実現化するために規準を限定する」<sup>注16</sup>ものとして存在する。

前者においては、R・カイヨワの「遊びは、本質上生活の他の部分から切り離され、慎重に区別された活動であり、通常、時間および空間へ厳密な限界の内部で完了する活動である」<sup>注17</sup>という解釈に該当するであろう。つまり、バレーボールや他のスポーツ種目においても同様、ゲームは主審の笛で始まり、笛で終る。これは現実の世界から切り離された、そこだけで通用する新しい世界での活動であることを意味する。そのような意味でTacticsにおけるルールはゲームの始まりと終りを関係づけると同時に、そのゲームに現実の世界からの介入を防ぎ、そこでの活動を神聖なものへと高める役割をも果している。

後者においては、「中味の良し悪しを構成し、評価の対象」<sup>注18</sup>とみなされるルールである。

近代スポーツでは、人間が主体で、人間が行うスポーツであるにもかかわらず、スポーツに付随する技術、規則が先行してしまい我々はその技術や規則に振り回されているような錯角を感じる。しかし、高度化された規則であるにもかかわらず現実に存在する規則を無視することはできない。理想的なゲーム展開を望む我々は、ゲームを規定するルールに従って活動せねばならない。

しかし、「最大効果を維持しながら行動するのは筋肉疲労、注意力の散漫などのためにいかに訓練された人でさえも困難なことである」<sup>注19</sup>。規則のために我々のプレーが低次元のものになるようではルールの存在は無意味なものである。

つまり、前述のブロック後のパッシングザセンターラインによるサイドアウト、又は相手側へのポイントは相手に危険性を与えないブロック、またタッチネットなしにスパイクボールをブロックする高度な技術獲得のための発展段階の過程で、それぞれの到達度の度合いをはかるものとみなすべきである。もし、パーフェクトなプレーが完成されれば、パッシングザセンターラインやタッチネットによるサイドアウト、又は相手側へのポイントという規則はなくなるであろう。

しかし、それが存在する限り常にプレイヤーは高度な、そして完全なプレイを追求するのである。従って、プレイヤーはこのルールを技術向上のための目安としなければならない。

このように、2つの意味をもつルールが効果的に発揮されたとき、そのプレイヤーの行動は理想的なものへと発展していくものとみなされる。

以上、プレイヤーにおけるTacticsについて述べたが、これらに関する要約は「Ⅲ」の「まとめ」にて行う。

## ② TeamにおけるTactics

チームとして最も重要なTacticsは、コントロール、リズム、ルールの3つの要素と考えられる。判断力、決断力、柔軟性は主に個人としてのプレイヤーにその重要性がかかわってくる。

団体としてとらえるチームに、Tacticsはどのようにかわるか、以下、チームにおけるTacticsについて概観してみる。

まず、チームにおける判断力は、チームがある状況に遭遇したときそのチームがどのように判断するかということになる。つまり、チームを代表するキャプテンが行う場合と、第三者の立場でゲームを見ているコーチからのアドバイスによって判断をするという二通り考えられる。いずれにせよ、チームにおける判断は個人個人の判断の総合によるものであるから、普段の練習において共通の理解を深めておかなければならない。

チームにおける決断力は、判断の結果、チームの目的に対しての統一行動を起す決断をいかに早く下せられるかということになる。

従って、そのチームが理想的なゲーム展開をしていくためには6人全員が二者択一の1つに焦点を合わせ、つまり「意志する」という心構えが素早く浸透し、いかに早く次の行動に移行できるかということになる。

また、チームにおける柔軟性は主に精神的な面での柔軟性が要求される。いわゆるゲーム中におけるチームの目標の変更に対して、全員が同時に素早く対応できるかという柔軟性として現われる。

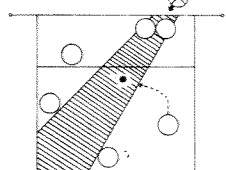
これら、判断力、決断力、柔軟性はともに、練習試合の積み重ねによって養われ、その量によってそのチームの判断、決断は速やかに行われ、あらゆる状況に対して柔軟性が増す。

以下、チームにおけるコントロール、リズム、ルールに対しての若干の考察を加える。

### a. Control

プレイヤーにおけるコントロールは「自分の身体が自分の意志のもとに統制されている」という状態であったが、チームにおけるコントロールは「共通の意志のもとに6人全員又は6人のうち幾人かが、ある状況に対して一体となって行動できる」という状態と換言できる。つまり、チームのキャプテンが判断し、チーム全員が決断の段階にさしかかったとき6人の中に共通の理解が速やかに浸透し、それを表面化し、チームプレーとして現わす能力ということになる。

図Ⅲ アタックレシーブ  
フォーメーション



例えば、アタックレシーブのフォーメーションはそのチームによって千差万別であるが、アタッカーからのスパイクボールが飛来しないと想定される範囲(図Ⅲの斜線部分)

へボールが落下した場合、そのボールに対するレシーブは誰れが最適であるか不明である。しかし、そのような状況に対しては練習を通し、レシーバーという小集団内で共通の理解を確認し合うことによって可能となる。つまり、練習によって小集団内に意志の統一がなされ、それを誰れがレシーブすると最適であるかという1つの知識が生まれ、類似したケースに対しても容易にレシーブでき、その範囲も広がる。

また、レシーブに余裕ができることにより、次の行動の先どりまでが可能となってくる。

### b. Rhythm

チームにおけるリズムはチームの技術的な良し悪しによる勝敗と同様、ゲームにおけるリズムの持ち方次第で技術的なものを越えて勝敗を左右するものとして現われてくる。

団体種目として扱われるバレーボールには、前述のように大きく4つのリズム形態が見られる。まず、ネットをはさんで敵対間のボールに対するリズム、自チーム6人の間のボールに対するリズム、コンビネーションプレイにおける対人間のボールに対するリズム、そして、個人に対して空間に存在するボールに対するリズムに区別される。

バレーボールはサーブ(攻撃)というプレイヤーと空間にあるボールとのリズムから始まり、サーブレシーブ(守備)というプレイヤーと空間にあるボールとのリズムから様々なタイプの攻撃へと展開されていく過程で、対人間、自チーム間、敵対間にリズムが生まれてくる。

しかも、それはボールをキープしているチームのリズムに服従させられ、何らかの方法でボールを手放した瞬間にリズムに対する主導権も失う。従って、その瞬間にどのようなリズムをもってボールを放すか、相手のリズムをどのように崩すかが問題になってくる。

例えば、攻撃におけるコンビネーションプレイは、1つには相手のリズムを崩すためにあるもので、ボールを手放したときもお自チームのリズムを維持させることにある。しかし、コンビネーションプレイのミスは自らリズムを放棄するものであり、チームの崩壊へと結びつく。

このように、バレーボールのリズムはサーブという攻撃のリズムから始まり、守備、攻撃という対人間、自チーム間、又は敵対間でボールの流れの中にみられるGracefulnessと個人、対人、チームにおける技術とのかみ合わせによって生まれるものであり、バレーボールのゲームはそのリズムの崩し合いと表現しても過言ではない。

チームにおけるリズムも、他の要素と同様練習の繰り返しにより、チーム独得のリズムが獲得されるものである。

### c. Rule

チームにおけるルールは根本的にはプレイヤーにおけるルールとあまり大差はみられない。プレイヤーにおけるルールが理想のプレイの実現にあるということは、チームにおけるルールはゲーム内容そのものの良し悪しを評価するものであり、ゲームのレベルの高低を表わす。

例えば、アラブ諸国に属するリビアと世界一流のソ連、ブラジルなどとのバレーボールのゲーム比較で、ルールに関するミスの差は一目瞭然である。この差は、単にバレーボールの普及度、あるいは体力的、技術的な面の問題として解決できるであろうか。つまり、高度に規定されたルールに対してどれだけ掌握できているのか、またそのルールを理想的なゲームを展開していく発展段階の目安としてどれだけ受け止めているかということ

になる。

前述のパッシングザセンターラインという規則について、相手の領域を侵犯したことに對する罰則ということではなく、パッシングザセンターラインを未然に防ぐと同時に、次の行為であるブロック後のボールにどれだけ有効な力を発揮できるかという1つの目安となるルールであらねばならない。

### 注(1. Tacticsとは)

1. 3. 5 KENKYUSHA'S NEW COLLEGIATE ENGLISH JAPANESE DICTIONARY 1971
2. 4 SANSEIDO'S NEW CONCISE ENGLISH JAPANESE DICTIONARY
6. Paul Weiss 「Sport; A Philosophic Inquiry」 Southern Illinois University Press 1969 P.86~P.99
7. Paul Weiss 「前掲書」 P.97
8. 9 Paul Weiss 「前掲書」 P.86
10. Paul Weiss 「前掲書」 P.86~P.87
11. Paul Weiss 「前掲書」 P.86
12. 13 Paul Weiss 「前掲書」 P.87
14. Paul Weiss 「前掲書」 P.86
15. Paul Weiss 「前掲書」 P.89

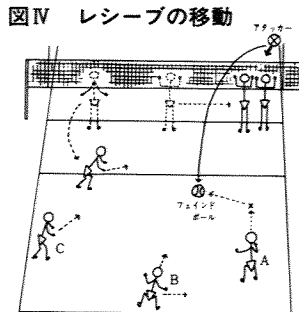
### 注(2. バレーボールにおけるTactics)

1. Paul Weiss 「前掲書」 P.89
2. Paul Weiss 「前掲書」 P.90
3. Paul Weiss 「前掲書」 P.93
4. Paul Weiss 「前掲書」 P.93
5. 6. 7 Paul Weiss 「前掲書」 P.94
8. 9. 10. 11 Paul Weiss 「前掲書」 P.95
12. 13. 14. 15 Paul Weiss 「前掲書」 P.96
16. Paul Weiss 「前掲書」 P.91
17. R.カイヨワ 「遊びと人間」  
清水, 霧生訳 岩波書店 1970 P.8
18. Paul Weiss 「前掲書」 P.91
19. Paul Weiss 「前掲書」 P.93

### III. ま と め

主に、プレイヤーにおけるTacticsの要約を図IVにそって展開する。

図IVはバレーボールのゲームで、相手のアタッカーからのオープン攻撃からフェイント攻撃への変換というパターンに対するブロッキングと後衛のアタックレシーブとフェイントレシーブに関するオーソドックスなフォーメーションを示したものである。



まず、自チームの6人は相手チームのセッターのフォームなどによりコンビネーションによる速攻か、レフトへのオープントスによる攻撃かを判断する。

相手チームのセッターはオープンへとトスを上げた。その瞬間、レシーバーはオープン攻撃に対する守備態勢へと移動の決断をまず行う。この段階における決断は攻撃がオープンということより緊急度は速攻に対するほど要求されない。同時にブロッカーも同様な判断に基づきオープン攻撃に対するブロッキングへと移動する。

次の段階として、相手チームのセッターのオープントスがアタッカーの望む所へとスされたかどうか、またアタッカーはトスに対してどのような態勢で、またネットに対してどのような角度で助走してきたかを判断する。

その総合的な判断により、守備側はスパイクで攻撃してくると判断する。

同時に、ブロッカーも同様な判断を経る。

そして、自チームのレシーバーはオープン攻撃に対する次の判断を行う。つまり、自チームのブロッカーは正常な位置についているか。他の5人と自分の位置関係は予定通りであるかを判断する。

いよいよ、相手側のアタッカーはジャンプして今にもボールを打たんという時点でさしかかる。その時点でレシーブ態勢へ移動という決断が下され、同時に自チームのブロッカーもフローアを離れ、レシーバーは一瞬早くレシーブ態勢へと移動する。この時点で、スパイクボールは自分のポジションへ飛来するものと考え、心と身体を飛来す



るボールに対してレシーブし、自チームのセッターへ返球するという意志のもとへ全てを集中させる。しかし、判断を翻すかのように、相手チームのアタッカーはフェイントで攻撃してきた。この時点で、今までの判断、そして決断は全て白紙に戻され、新たな段階へとさしかかる。

まず、フェイントに変わったということを瞬時に判断し、それに対して前進か後退か、又は止るかへの処置を同時に判断し、誰れがレシーブに入ったら最適かを判断する。

ここで、プレイヤー、チームに要求されるのがTacticalな判断である。その結果、Aがレシーブに入るのが最適であると判断し、Aはアタックレシーブの態勢から急変させ、フェイントレシーブへと移動の決断を下す。この時点で、A、B、Cのプレイヤーには「自分の身体が自分の意志のもとに統制されている」ということが要求され、同時に「共通の意志のもとに、3人がある状況に対して一体となって行動できる」ということが要求される。B、Cのプレイヤーは前進している身体を止め、次の行為へと移動する態勢が要求され、Aのプレイヤーはアタックレシーブからフェイントレシーブへと身体を自分の意志のもとに急変させることが要求される。この時、Aには状況の急変に対する精神と肉体の柔軟性が要求される。

また、このような判断から決断、そして変更、また判断から決断は空間にあるボールに対しての個人及びチームのリズムである。強打に対するレシーブ態勢へのプレイヤー及びチームの移動、そして強打からフェイントへの身体の移動は個人及びチームがもつリズムであり、この前進、後退、休止のうちの1つにでもズレが生じるとチームのリズムは乱れ、フェイントボールに対するレシーブは不可能となる。

また、ルールはブロッキングに出た時、ミスすることなくブロックするという技術の向上を目指すものであり、レシーブにおいてドリブルをすることなくレシーブするにはどのような態勢、どのような動きであったらよいかという目標になるものである。

我々は、プレイヤー、チームの技術向上のためにあらゆる方法において努力し、また練習を積み重ねてきている。技術向上のために体力向上を、体力向上のためにトレーニングの強化を、また勝利のために新しい戦法をと前へ前へとその行き止

まりを感じさせない。

しかし、省みたとき何かを忘却してきているのではないだろうか。それは、あまりにも常識化してしまい、無意識の世界のものとなってはいないか。スポーツ場面で、ある状況に遭遇したときどうすべきかを判断し、行動に移す決断をする。その判断、決断という行為があまりにも一瞬故に意志しないではないだろうか。自分の身体が自分の意志から離れ、それ自体で活動しているのではないであろうか。

また、様々な攻撃パターンにおぼれ、ボールとのリズムをつかみきれないではないであろうか。身体の柔軟性が先行し、精神の柔軟性を置き忘れてはいないだろうか。ルールは理想の実現化であるものが、逆にルールに追い回されているのではないだろうか。

Tacticsの6つの構成要素、「判断力」「決断力」「統制」「リズム」「柔軟性」「ルール」を省みることが、プレイヤーに、チームによりTacticalなプレイを注ぎ、理想的なバレーボールへ発展するものと考えられる。

## 参 考 文 献

- (1) 松平康隆、豊田博他編著  
『バレーボールのコーチング』  
大修館書店 1979年
- (2) 豊田直平、山本隆久編著  
『バレーボールの教科指導』  
遊戯社 1980年
- (3) 日本バレーボール協会指導普及委員会編  
『バレーボール指導教本』  
大修館書店 1977年
- (4) Paul Weiss 『Sport:A Philosophic  
Inquiry』  
Southern Illinois University Press 1969年
- (5) R.カイヨワ 『遊びと人間』  
岩波書店 1970年